



『共に育つ』

20240201

園長 太田友子

「小学校につながる確かな学びの基礎を培う幼児教育」

早くも立春を迎えます。玄関の桜草のつぼみが可愛い姿を見せる頃となりました。



さて、園では、生活発表会にむけて、これまでのごっこ遊びの経験を繋ぎながら、お話の世界を演じる「劇遊び」が真っ最中です。世界で一番速い乗り物は、人間の「想像力」と、ある広告で見たのですが、想像力を働かせてその世界に浸るといって極めて高度な能力を、すでに子どもたちは身に付けています。子どもたちの想像力は、実に奔放で生活にも密着していて、時には「え？そうくる？」と教師たちも吹き出しながら、一緒に愉しんでいます。

小学校につながる確かな学びの基礎を培う幼児教育

～ 豊かな遊びから確かな学びへ ～



1月22日(月)、奈良教育大学名誉教授 重松敬一先生と兵庫教育大学大学院教授 加藤久恵先生がご来園され、年長児と年少児の交流「冬まつり」を参観されました。先生方とは、現在、科学教育研究費の助成のもと、幼児と小学校低学年児童を対象に算数の学習方略を支えるメタ認知の育成について共同研究に取り組んでいます。

幼児期の遊びは重要で、貴重な経験をしているとは言われますが、それはどのような活動で、それがどのように小学校の学びにつながるのか、幼小連携は重要だとは言うものの、実際のところ、現場においてどのような活動が小学校以降で生かされているのか、十分に明らかになっていません。

幸い、私自身が小学校で算数教育を研究してきましたので、幼児期の生活に埋め込まれている算数的な活動に大変魅力を感じています。教師がその価値を意識し、子どもが園生活の中で繰り返し活動する過程で、気付きを話したり、そのことを絵図に表したりしながら、実感を伴った「理解」へと促す保育をすすめています。例えば、「どうして柿を10ずつまとめて数えたの？」の発問をすると、「だってめんどくさいから」と。「めんどくさいって、どういうこと？」と算数的な価値に気付けるように導いていきます。また、他児の考えを聴いて自分の学びを広げたり深めたりする話し合い活動も年長児では活発にできるようになってきました。

参観後、「教室の細部まで考えられた学習環境や先生方の動きが素晴らしく、何より元気に生き生きと働いておられる先生方に感服いたしました。」と講評をいただきました。

他の幼稚園の「まつりごっこ」との違いは、教師の意識の高さにあると考えています。



知恵と勇気のある子育て

社会性をはぐくむとは…

人との向き合い方 ものごとの向き合い方

自分中心の時代から、少しずつ自分と違う「存在」に気付き、その中に自分と同じ「思い」をもっていることに気付き始めるのが幼児期です。

幼稚園は学校の始まり。幼稚園生活は「小さな社会」です。いいこともあれば、嫌なこと、困ったこともあるのが「社会」です。その中で明るくたくましく生き抜く、知恵と勇気をもつ人に育ててほしいと願っています。その際、肝心なのは、大人の反応で、子どもの社会性に大きな影響を及ぼしています。

ご家庭では、次の対応のどちらでしょうか？

<明るくたくましく生きる知恵と勇気をはぐくむ対応>

「おかえり、今日は楽しかった？」

「楽しくなかった！〇〇ちゃんとけんかした。」

「なぜ、けんかになったの？」

「だって、～やから。」

「〇〇ちゃんはどう思っていると思う？」

「う～ん？」

「これから、〇〇ちゃんとはどうしたいの？」

「もうけんかしたくないけど、ごめんって謝ってほしい」

「じゃあ、明日〇〇ちゃんに嫌やったからやめてほしいと言ってごらん。〇〇ちゃんもきつと悪いことしたなと思っているよ。」

「うん、言うてみる。」

「それでも伝わらなかつたら、先生に相談してごらん」

「うん、わかった」

<…な対応>

「お帰り、今日は誰かに嫌なことをされなかつた？」

「え？うん、あっ、そうそうういえば…」

(子どもは忘れていたのだが、お母さんの気持ちを察して？無理して思い出す。)

「それはひどいわ、それでその子は謝ったの？」

「謝ってないけど…」

「わかった、お母さんが先生に言うわ。ゆるされへん。」

これは、小学校で実際にあった事例です。親の対応は幼児期からすでに始まっていたようで、やがて不登校傾向になり、その後改善まで大変な苦勞をされました。

さて、幼稚園は学校の始まり。今から、大人の向き合い方が問われていることを十分に自覚してほしいと思います。

本園では、「共に育てる」パートナーとしての関係づくりをお願いしています。子育ては誰も初めてであり、「心配」「不安」「迷い」「悩み」はつきものです。ですから、子どもに知らせずに、大人間での知恵と勇気のある関係の中で解決できればと願っています。一番避けたいのは、困ったらすぐに親が動いてくれる？解決してくれる？と子どもが学習してしまうことです。親は、まずは嫌だったという気持ちに共感すること、次にどうしたらいいのか、背中を押してあげることではないでしょうか。

もう一つは、「共に育つ」です。我が子の反応の仕方を見て、自分の子育てを見直す契機にしてほしいです。少し神経質になりすぎているか、過保護になりすぎているかなど。望ましい子育てには「気付き」ながら微調整が必要です。「共に育つ」には、「気付き」によって「自分育て」も愉しめるようにとの願いも込められています。心から「エール」を送ります！